

P D A の薬物療法に関する研究

② 臨床的研究

埼玉医科大学小児科

宮路 太

目 的

未熟児の動脈管開存症の薬理的閉鎖を目的として従来主として用いられてきたインドメサシンは、重篤な副作用として腎機能抑制作用があり使用に際して嚴重な注意が必要である。スリダクは腎機能障害が非常に少なく動物実験で強力な動脈管収縮作用が認められるため、腎機能の未熟な未熟児に用いるのに最も適する薬剤と考えられたので、臨床的使用を試みた。

対象及び方法

当院未熟児センターに入院した未熟児で、動脈管開存症（以下PDAと略）による心不全があり、水分制限と利尿剤による治療に反応しない症例にスリダクを投与した。スリダクは胃チューブより1mg/kgを1日3回8時間ごとに2～3日投与し、投与前後の理学的所見および心エコー図により効果判定をし、投与前後に尿量、クレアチニン、尿素窒素、APTT、PT、GOT、GPTなどの検査をして、腎機能、肝機能、血液凝固に対する影響をみた。（東京女子医大、門間和夫博士の提案、昭和58年10月による。）

結 果

症例1、症例2ともにIRDSで人工換気療法

を行い、IRDSの改善後に再び臨床症状の悪化があり、PDAによる心不全のためと診断され、12日と5日にスリダクを開始した。投与期間はともに3日間であり、2例とも有効と判定された（表1）。理学的所見と心エコー図は、人工換気療法の条件が下げられたこと、弾性脈の程度の低下、CTRと心雑音の改善、LA/AOの低下などの変化があった。しかし、心雑音の消失、LA/AOの正常値への改善などはこの2症例ではえられなかった（表2）。副作用に関しては、血小板数、凝固時間、腎機能、肝機能などへの影響はみられなかった（表3）。

考 案

我々が従来インドメサシンの適応としてきた症例にスリダクを投与したところ、2症例ともに有効と判定された。しかし、心雑音の消失、心エコー図の正常値への復帰はえられなかった。これは症例数が少なく著効例が含まれていないためか、スリダクの投与量が1mg/kgでは少ないためと考えられる。副作用は認められなかった。今後症例数を増して研究を続けたい。

表1.

スリダクの効果

	症例 1 ♂	症例 2 ♀
在胎週数	31	27
出生時体重 g	1930	1476
IRDS	+	+
スリダク開始	12日	5日
投与法	1mg/kg 1日3回3日間	1mg/kg 1日3回3日間
効果判定	有効	有効

表2.

投与前後の変化

理学的所見と心エコー図

	症例 1		症例 2	
	前	後	前	後
心拍数(分)	134	140	160	148
呼吸数(分)	66	53	47	50
人工換気条件	FiO ₂ 0.25	0.25	0.35	0.25
	RR 60		45	10
	Pr 15/5	抜管	15/5	15/5
CTR(%)	64.7	62.6	心肺境界不明	54.1
心雑音	IV/VI	II/VI	III/VI	III/VI
弾性脈	+	+	+	+
肝の大きさ	3	3	1	1
LA/AO	1.73	1.25	1.6	1.25

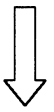
表 3.

投与前後の変化
副作用について

	症 例 1		症 例 2	
	前	後	前	後
血小板数(万/mm ³)	28	48	31	37
aPTT (Sec)	34.8	34.9	38.6	42
PT (Sec)	13.0	12.4	16.3	11.5
Na mEq/L	141	140	136	131
K mEq/L	5.3	4.7	5.9	6.5
血清Cr mg/dl	1.3	1.7	1.3	1.6
血清BUN mg/dl	15	15	32	30
GOT U/ml	ND	ND	61	31
GPT U/ml	ND	ND	19	16
尿量 ml/日	189	113	116.8	156.5



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

未熟児の動脈管開存症の薬理的閉鎖を目的として従来主として用いられてきたインドメサシンは、重篤な副作用として腎機能抑制作用があり使用に際して厳重な注意が必要である。スリダクは腎機能障害が非常に少なく動物実験で強力な動脈管収縮作用が認められるため、腎機能の未熟な未熟児に用いるのに最も適する薬剤と考えられたので、臨床的使用を試みた。